

留学報告書 ～海外留学とマイノリティー～

コンケン大学
国際文化学部（長期）

留学する際に必要なものは何か？と問われたら、私は、「マイノリティーになる覚悟。」と答えるだろう。留学に出発する直前、国際福祉論の講義で教授に言われた、「あなたも留学に行ったら、マイノリティーになる。」この言葉を私は今もよく覚えている。唐突に何を言い出すのだろうか？と思った。しかし、全く理解出来なかった訳でもない。この時は、確かに理屈の上では理解していたと思う。けれども、実際にタイで生活を始めるまで、本当の意味で理解するという事は不可能だった。

日本で、日本人の両親の元に生まれ、五体満足に育ってきた私は、この国の社会で圧倒的なマジョリティーだ。集団生活の中で多少の疎外感を感じても、普通に生活しているだけなら何も感じない、大多数の中の一つに紛れ込んでいられる。しかし、一歩でもこの沢山の四角形の集合体から外れて、丸の集合体の中に飛び込むと、自分の存在だけが異質に感じ、ただ生活しているだけで周りの視線に敏感になる。この感覚がマイノリティーになるという事だろう。かと言って、この感覚は全てがネガティブな事ではないと思う。そもそも、海外に行けば当たり前のことだろう。また私は、行く国の文化や日本との関係性によってこの感覚の内容は変わるのかもしれないとも思う。この報告書では、タイで、私が感じたマイノリティーになる感覚と、私がそれにどう適応していったか、そこから何を学んだか、を書いていこうと思う。

まず初めに、何が人をマイノリティーにするのか？という所だが、これは当然「違い」だろう。多数派の存在との違いが人をマイノリティーにする。海外留学の場合その違いは、容姿や文化の違いだろう。前に書いたように、図形の丸の集合体の中に、いきなり四角形の私が入っていったような、異質な物の参入に、多数派の人々は良い意味でも悪い意味でも注目する。一挙手一投足を観察して、その人がどのような質の人間なのか、自分達にどんな影響を与えるのか、気にするのだ。

私が最も苦しんだのは、視線だ。自分が日本人であるがために向けられる、異質なものを見る目。自分に向けられるものから、そうでないものまで全てが自分に向かっているように感じる。朝家を出て、バス停に向かうまでにすれ違う人々が私を見ている。バスの運転手さんが私のタイ語を聞いて、はっとした顔をする。ただ、大学内を歩いているだけで、どこからか「コンイーブン(日本人)」という囁き声が聞こえてくる。それが、自分の事じゃないとしても、自分のことを噂しているのかも、何か悪い事を言われているような気がしてならなかった。授業のクラスに入ると、同い年くらいの学生達の視線、好奇と警戒の目があった。きっと欧米の方に留学した方が、このような視線を強く頻繁に感じるのでは

ないかと思う。タイは同じアジアで、見た目が大きく異なっているというわけではないからだ。しかし、人生初の長期留学で、緊張していた私は、少し神経質になっていたのかもしれない。そのせいもあって、自分がマイノリティーである事に、自分自身が一番引け目を感じていた。しかし、そんな風に四六時中気を張っていたのも最初だけで、一か月ほどでこの感覚にも、慣れていった。

またある時、授業のグループでプレゼンテーションをすることになった。本番前に、カフェで打ち合わせをする事になり、みんなで12時に待ち合わせをしていた。もちろん、そのグループに留学生は私だけだった。12時前にはそのカフェに行きドリンクを一杯頼んで、空いている席に着いた。まだ、メンバーは誰も来ていないようだったので、みんなでやる予定だったスクリプト作りを始めて待っていた。15分が過ぎても誰も来なかった。6人グループなので、あと5人来るはずだった。また、驚くことに誰からも遅れる旨の連絡がなかった。30分以上が経過したころ、やっと他のみんながやって来た。私のドリンクはもうほとんどなかった。彼らは、さらりと謝った後に、「でも、これがタイスタイルだから。」と言った。ここでは、約束の時間通りに来た私が少数派だったのだ。ああ、私が違っていたのか、と、タイでの時間の感覚を学んだ。それからは、約束の時間ピッタリに行くようにしたり、それより少し後に着くようにしたり、慣れてくると集合時間に家を出ても問題なく友達と集合する事が出来るようになった。

ここまでマイナスなことばかり書いてしまったが、クラスでたった一人の留学生になることは悪い事ばかりではない。なぜなら、どんな社会にも一定数の優しい人がいるからだ。一人で困っている人間がいれば、声をかけて助けたり、一緒に他愛もない話をしてくれたりする。タイの観光地に旅行者として行ったりすると、そういう人が多いような気もする。さすが、微笑みの国タイだ。二学期目の授業はそんな優しいタイ人の友達に沢山助けられた。慣れない授業のシステムや、大学での暮らし方、困り事など、留学生である私が悩むであろう部分を、気にかけてサポートをしてくれた。どんな小さな事でも、相談する相手がいるという事は、何とも言えない安心感を私に与えてくれた。授業以外でも、一緒に遊んだり、ご飯を食べたりして、楽しい思い出を作ることができた。異質な存在というのは、良い方に転がれば、多数派にとって大きな利益になる。新しい知識や、出会わなければ知る事がなかった価値観を、与えてくれる。私も、彼ら彼女らにとってそういう存在に一瞬でもなれていたら幸いだ。

最後に、私が留学で感じたマイノリティーになるという感覚は、生まれ持ってマイノリティーである方々や、長期的にマイノリティーとして生きなければならない方々に比べれば、生易しいものだろう。私は、浅瀬で溺れているような気分でした。ただただ、常日頃からこの感覚と共に生きている方は、もっと底の見えない沖の海でもがいている。改めて文字に起こすと、本当にそうだったと思う。それでも、一瞬でも自分がマイノリティーになる感覚を肌で感じる事ができたおかげで、リアルにその方々の立場に立って寄り添えるようになったと思う。日本で働く外国人、性的マイノリティー、精神・身体的な障

がいを持つ方々、そういった方々の暮らしの中で、たとえ直接的にサポートすることが出来なくても、自分の間接的な関わり方、目線の送り方一つで、不快感や、引け目を感じさせないように出来る。またその逆もしかり。私は、このタイ留学で大きく英語力を伸ばすことが出来、タイ語の知識を広げる事も出来た。しかし、それらの学問的な知識に負けずとも劣らない貴重な財産が、この「自分自身がマイノリティーになる」という体験だ。今回の留学で私が得たこの知見は、どこの大学の授業でも習うことは出来ないだろう。